

となりの姉妹

長野まゆみ



講談社
文庫



講談社文庫

常州大学図書館
蔵 姉妹の物語

長野まゆみ

講談社

|著者| 長野まゆみ 東京都生まれ。1988年『少年アリス』で文藝賞受賞。近著に『お菓子手帖』『レモンタルト』『白いひつじ』『野川』。他、著書多数。

長野まゆみの公式サイト 耳猫風信社

<http://mimineko.co.jp/>

長野まゆみのブログ コトリコ

<http://kotorico.exblog.jp/>

となりの姉妹^{しまい}

ながの
長野まゆみ

© Mayumi Nagano 2011

2011年5月13日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社ブリプレス管理部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276600-5

となりの姉妹

5

解説 石田 千

220



講談社文庫

となりの姉妹

長野まゆみ

講談社

となりの姉妹

5

解説 石田 千

220

となりの姉妹

姉妹はふたりともいい年頃だ。器量はそこそこで、化粧をすれば美人で通る。十年ほど前まではおばあさんとの三人暮らしだったが、その人もすでに亡く、今は姉妹だけで一軒家に住んでいる。

となりの姉妹は、こんど二階を改築して間貸しにするらしいね。

半年ほど姿をくらませていた兄が、どこかで人を騙していそうな装なりであられ、そんなことを云う。藍のぼかし染めのTシャツにジーンズをはき、頭に黒っぽいバンダナを巻いている。田舎暮らしでもはじめそうな恰好だが、庭の草むしりさえしたことはない兄に畑仕事ができるとは思えない。

このまえ別れたときは温泉地をまわって肌着を売り歩く商社員だった。古びた背広をみすばらしく着て、まあ骨折りだねえ、と同情してもらえば契約したも同然だとうそぶいた。半年も雲隠れしたあげく、また職を転じたと云うのだから呆れる。だいた

い、どうしてとなりの姉妹なのだ。

べつに階段をつけて、そこへトイレもこしらえるそうだよ。風呂は銭湯へいってもらうつもりなんだろう。

兄は聞き手の困惑などおかまいなしにつづける。このところ、となりの家の前へたびたび工務店の車がとまっていた。近所のことをむやみに気にする母などは、姉妹のどちらかの結婚がきまり、世帯を分けるのだろうと当て推量した。お祝い事ならお披露目があるまで静観するつもりだった。

間貸しとは予想もせず、わたしも母も先々の面倒を見越して不安をおぼえた。ただ、頼る縁者もなさそうな姉妹にとって、生計を助ける工夫が必要なのは理解できる。一軒家のふたり暮らしは、いかにも不経済だ。

浅く土を掘りかえすだけで、やたらと鏡が出てきたんだよ。手鏡だったり、額縁がくぶちふうの吊るし鏡だったりするんだけど。兄はなんだか、つながりのない話をはじめた。わたしと母は、貸し間へ入居する人によつては近所つきあいがやつかいだと案じているところだった。……鏡ってなに？ だからさ、となりが藪だったときの話だよ。地

面にいろんな鏡やその破片が埋まっていたんだ。半端な数じゃなくてさ。毎日掘つて、木箱に蒐^{あつ}めたんだ。かたちが残っているのだけでも、三十いくつかはあつたかな。ほかに砕けたのやひび割れたのが山ほど出てきた。

古い鏡なの？ いや、そうでもない。なかには骨董まがいのもあつたけど、たいていはどこの家にもあるようなプラスチック製の柄^えがついた、子どもがオモチャにするような鏡だな。かたちや色はさまざまで、……なんていうのか、鏡を供養するためにあちこちから蒐^{あつ}めたようなばらけかたさ。

兄とは八つほど歳が離れている。だから、わたしはとなりが藪^{やぶ}だった時代を知らない。ものごころついたときには、家が建っていた。今も当時のままだが、わが家より数年遅れて建つたとは思えないほど古風な造りだ。ほかから移築したのかもしれない。となりが建築中だったときの母の記憶はあいまいだ。

だって、全体に蔽^{おほ}いをかぶせてあつたのよ。上棟式も内々にすませたようだし。でもたしかに、玄関の軒屋根があんなふう^{ひさし}にうねっているのはめずらしいね。母が云うのは廂^{ひさし}のうえにある唐破風^{からばふ}のことだ。

わが家の前で、道は急に変な角度でまがる。そのためとなりの敷地は道路と斜めに接していた。門扉から玄関へいたる植えこみの部分も変形の三角地で、道なりに進

むほど家屋との距離がせばまる。子どもの頃は、見あげる軒の唐破風が蛇か竜のようにうねって、こちらへ迫ってくる気がしたものだ。黒い瓦の重なりはうろこを思わせた。廂の内側は腹で、軒灯がともれば竜がその懐ふところに玉を抱えているようだった。

ガガイモだのヤブガラシだの昼顔だのがたくさん茂っていて、変わった蝶がくるんだよ。浴衣を着た女みたいな蝶でさ。動きがゆったりしていて、その気がなくても捕まえたくなるんだ。兄の話はまた飛躍する。

あんた、いったい何しに帰ってきたの？ 母はとうとう堪こらえかね、兄を問いつめた。三十二歳になる男がどこでどう暮らしているようと、親の出る幕ではない。無事であればけっこうというものだが、それは独身ならばの話だ。兄には妻子がある。別居してそろそろ二年になる。もどるのか、籍を抜くのかをはつきりさせるべきだと母はごくまっとうな忠告をする。その最中に、兄はとなりの改築話など持ちだしたのだ。

内輪のもめごとと、となりの姉妹とはなんの関係もない。しかも、兄は彼女たちと親しいわけでもないのだ。姉の逸いっこ子さんとは同じ歳で、中学までは同じ学校に通っていた。だが、かつて神経質な少年だった兄は、男子生徒を家に呼ぶことはあっても、女子生徒を近寄らせはしなかった。逸いっこさんも例外ではなく、兄の同級生としてわが

家を訪れたことは一度もない。

おとなになつてから、隣人としてつきあうなかでの往来はある。回覧板を持ってきた逸子さんがしばらく母と話しこんだり、自治会のバザーに出品する手芸品を姉妹とわたしとでいっしょに家でこしらえたりする。でも、それは兄が家を出たのちのことだ。

歳の離れたわたしは兄や姉妹にとってながらく「おちびさん」だった。今では姉妹より背も高く、バザーの手芸品もわたしが見本をこしらえ、家に集まってくる人たちがそれを真似る。これはわたしの専門でもあるからだ。それでも、佐保^{さほ}ちゃんは器用ねえ、と云われるたび、姉妹に頭を撫でられそうな気がしてならない。

菊屋の小母^{おぼ}さんの葬式があるんだろう？

兄はそれで帰つてきたのだとほのめかす。そうよ。急病で倒れて、そのまま亡くなつたのよ。まだ還暦前なのに。でもみんながおどろいたのは、あの奥さんがずっと歳をごまかしていたことなの。五十になつたばかりだつて、おとといまで信じてたもの。長いつきあいなのね。菊屋にお嫁にきたときからごまかしてたつてことよ。実際、若く見えただから、感心するわね。もう十歳若いと云われても信じたかもしれ

ないくらい。だけど、三十になろうって息子がいるんだもの。いくらなんでも。四十七ってことはないわけだけど。きょうがお通夜であすが告別式よ。あんた、顔を出すつもりならどこかで喪服を借りてきなさいよ。頼むから、その変な恰好で出るのはやめて。

生きているうちに訊きたいことがあったのになあ。たぶん小母さんしか知らないと思うんだ。

なにを？

となりの藪に鏡を埋めていたのは、菊屋のおばあさんなんだよ。小母さんの姑しゅうとの。あそこはおとなりが越してくる前は菊屋の土地だったろう。日が暮れてから、念仏のようなのを唱えながら埋めてたんだ。何の呪まじないだったのかと思ってさ。

菊屋はこの町内で昔から酒屋を営んでいる。土地もけっこう持っていて、それぞれアパートや駐車場にしている。御用聞きで成りたっていた商売は細る一方だが、暮らしにはさしつかえがない。こんど亡くなった小母さんは当代の奥方で、配達や力仕事が好きで働きたった。話好きでにぎやか過ぎるという難点はあるけど、悪い人ではなかった。

母たちの目に小母さんが若く映ったのは、すっかりおばあさんだったお姑さんと同じ居していたからだろう。お姑さんは、近所の子どもたちをやたらと叱るので鬼婆と呼ばれたらしい。ただ、わたしが知っているその人は、いつも店の前でひなたぼっこをしている小さなおばあさんだった。薄くなった白髪でこしらえた小さなお団子^{だんご}を頭のとっぺんにのせ、紅い珊瑚玉^{あかさんごだま}の飾りを結んでいた。かつてはお洒落な人だったにちがいない。もうずいぶん前に亡くなった。

小母さんは顔がひろいこともあつて縁結びに熱心だった。今どき、近所の世話で結婚する人は稀^{まれ}だと思うが、独身者には声をかけずにいられなかったようだ。

でも、ごめんなさいね、佐保ちゃんに紹介できる人はなかなかなくてねえ。大型のバイクを乗りまわして配達にやってきては、さもすまなそうな顔をこしらえる。妙な云い草だ。わたしはべつに頼んだおぼえはない。

兄のことが縁談にさわると云いたいらしかった。外聞が悪いのは否めない。なにしろ、すぐ行方知れずになるかと思えば、素知らぬ顔をしてふらつと舞いもどる。そのたびに、いちいち別人のような風貌になっている。詐欺でもやってなきやいいんだけど。母は兄を気づかってさんざん白髪をふやしたすえ、今ではすっかりあきらめ、茶化す余裕もある。